

114-1 神田川のみなもとまで 1 下流(13.0km)

【街歩き概要】

井の頭池の湧水を源として東へと流下し、隅田川に注ぐ神田川をひたすら歩く。  
第一回は、隅田川への注ぎ口から曙橋・高田橋（高田馬場駅）までをたどる。



柳橋

地図豆知識：神田川（共通）

神田川は、三鷹市の井の頭池を源として流下し、善福寺川、妙正寺川を合流したのち、JR 水道橋駅付近で日本橋川を分派し、隅田川に注ぐ全長約 25km の河川である。

かつては、神田川の関口大洗堰から上流部分を「神田上水」、同堰から飯田橋付近までを「江戸川」、さらに下流を「平川」あるいは「神田川」と呼んでいた。それは飯田橋から下流部分が 1660 年に「平川放水路」として人工的に開削されたからである。

最近では、都市化に対応する流下能力を増強するため、江戸川分水路、高田馬場分水路（下落合）、水道橋分水路などが、さらには本流の「環状七号線地下調節池」だけでなく、善福寺川、妙正寺川にも地下調整池が建設されている。

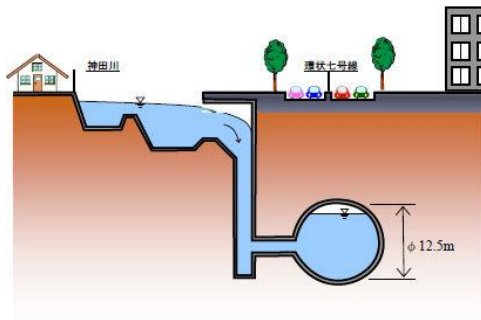


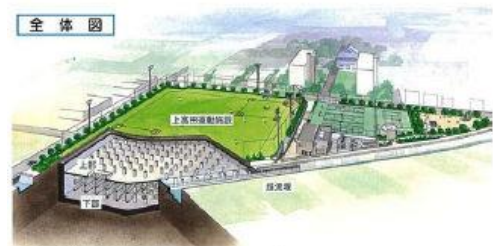
図 2-2 神田川・環状七号線地下調節池概念図



上高田調節池 写真



神田川・環状七号線地下調節池

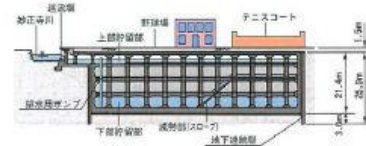


上高田調節池 全体図



神田川取水施設取水状況

断面図



上高田調節池 断面図

## 「地下調節池」について

### 【道順】

浅草橋駅→柳橋→浅草橋→和泉橋（船泊掘割跡）→柳森神社→万世橋（駅跡・マーテエキュート）→昌平橋・淡路坂→聖橋→湯島聖堂→ニコライ堂（几号水準点）→御茶ノ水→御茶ノ水溪谷最高所・サイカチ坂→水道橋（水準点・六差路）→後楽園→北野神社→神田上水跡（金剛寺坂・新坂・荒木坂・脇部坂・大日坂）→新江戸川橋（駅）・目白坂→椿山荘→新江戸川公園→距離標・7km→染ものがたり博物館・面影橋（山吹の里）→曙橋→高田橋→高田馬場駅

### 【街歩き解説】

・浅草橋駅から柳橋

柳橋あたりの堤について、「江戸名所図会」には「柳原土手 筋違橋より浅草橋へ続く。」

その間長さおおよそ十町許あり、享保年間ここの堤にことごとく柳を植栽した。」とある。寛永 11 年（1635 年）の江戸絵図にも柳堤とあり、「堤の外は神田川なり。またこの堤の下には柳森稲荷と称する祠あり。ゆえに、この地を稲荷河岸と呼べり。…この川の南北ともにおしなべて、柳原といひし広原なりし。」とある。

もちろん、柳橋は江戸中期からある古い花街である。明治期には新興の新橋と共に「柳新二橋」と称され、大学生にも人気の盛り場として賑わったとか。昭和 3 年には、料理屋、待合あわせて 62 軒、芸妓 366 名の大規模を誇り、芸妓の技芸も優れ、新橋演舞場や明治座に出演し披露していた。代表的な料理屋は伊藤博文が利用した「亀清楼」であった。



柳橋から上流を見る

#### ・浅草橋あたり

柳橋、左衛門橋の次が浅草橋、そして和泉橋、美倉橋である。

左衛門橋は出羽鶴岡藩酒井（左衛門尉）家の屋敷があったことから、和泉橋は藤堂和泉守の屋敷があったことから、美倉橋は三つの蔵地があり、辺りが「三蔵地」と呼ばれたからだという。浅草橋辺りまでの水面には屋形船が並び、浅草橋には浅草見附碑がある。

#### ・秋葉原船溜り（左岸：河川の下流に向かって左側）

むかし和泉橋の北詰から秋葉原駅にかけて、L 字状の入堀があった。そこは明治 23 年（1890）に秋葉原貨物駅が開業したのに伴い、神田川の水運と連絡するため開削された船溜りと掘割で、昭和 30 年代まで規模を縮小して存続していた。一帯は神田佐久間町、佐久間河岸と呼ばれ、佐久間平八という材木商がその名の由来といわれる。

辺りは材木商が多いことで、度々火災にも襲われたところでもあり、明治 2 年の大火をきっかけに、現秋葉原駅一帯に火除け地を設け、鎮火神社（のち秋葉神社）を祀った。この火除け地が秋葉の原と通称され、秋葉原の由来となった。和泉橋の北、現公園辺りに船溜りがあったところ。



・柳森神社（右岸）

長祿 2 年（1458）、太田道灌公が江戸城の鬼門除けとして、多くの柳をこの地に植え、京都の伏見稲荷を勧請したことに由来する神社である。また、おたぬき様と呼ばれる親子狸のお守は、勝負事や立身出世、金運向上にご利益があると信奉されている。辺りの路面から一段低くなったところにあって、従来の川べりの低さを実感できる。



路面から一段低くなった柳森神社とカ石

・万世橋駅（跡）

神田川に面する万世橋界隈は江戸時代から繁栄していた。

甲武鉄道が明治 22 年（1889）立川・新宿間を開通させたのち、都心への延伸を進めて、明治 45 年には万世橋駅の営業を開始した（のちに国鉄となった）。初代の駅舎は東京駅と同様に辰野金吾の設計による赤煉瓦造りで豪華なものであった。なお万世橋駅の開業によって御茶ノ水・万世橋にあった昌平橋駅は役目を終えて廃止された。その後昭和 18 年には万世橋駅も営業休止し、交通博物館となったが平成 18 年に廃止された。

現在、旧万世橋駅や交通博物館時代と変わらない連続するレンガアーチ、階段、壁面、プラットフォームなどの遺構がよみがえった空間にあるのが「マーチエキュート神田万世橋」である。



「マーチエキュート神田万世橋」 / 万世橋

・旧万世橋駅（右岸）、交通博物館時代の主な遺構

旧万世橋駅の開業時に作られたホーム部分を『2013 プラットホーム』として整備し、デッキとしてよみがえった。高架橋にある旧万世橋駅のふたつの階段を通り、線路階にあるホームに上り、実際に駅構内を歩く気分で行遊できる。ホームではガラスに囲まれた展望カフェデッキが待っている。辺りは、中央線がすぐ両脇を行き交う特別な空間でもある。

・昌平橋から水道橋へ

徳川綱吉が、孔子廟である湯島聖堂を建設した際に、孔子生誕地である魯国の昌平郷にちなんで命名されたという「昌平橋」を経て、淡路坂を上り、お茶の水から水戸角坂（サイカチ坂）を下り水道橋へと向かう。興味にしたがって、聖橋・湯島聖堂・ニコライ堂（几号水準点）・神田上水掛樋跡・本郷給水所公苑などに立ち寄るといい。



昌平橋先から聖橋 / 水道橋あたり

・聖橋

聖橋は、昭和 2 年（1927）架設の震災復興橋の一つである。復興院橋梁課嘱託の山田守デザインの鋼とコンクリートによる大胆なアーチの造形が特徴で、震災後の東京の新名所

となった。橋の名称は一般公募で決められ、ニコライ堂と湯島聖堂を結ぶ橋の意でつけられたという。

・湯島聖堂（左岸）

湯島聖堂は、徳川五代将軍綱吉が儒学の振興を図るため、元禄 3 年（1690）湯島の地に聖堂を創建して上野忍岡の林家私邸にあった廟殿と林家の家塾をここに移した。その後、およそ 100 年を経た寛政 9 年（1797）幕府直轄学校として、世に名高い「昌平坂学問所（通称『昌平校』）」を開設した。

・ニコライ堂（と几号水準点）（右岸）

ニコライ堂は、正式名称を「日本ハリストス正教会復活大聖堂」という。カサーツキン・ニコライ神父により企画され、ロシア人建築家シチュールポフの基本設計を基に、丸の内三菱 1 号館の設計で知られるコンドル博士の実施設計・監督により明治 24 年（1891）に完成した。ビザンチン風の建物と高く響く鐘の音は、異国情緒たっぷりで、神田の名物の一つとなっている。関東大震災で崩壊したが、岡田信一郎の設計により昭和 2～4 年にかけて復興工事が行われた。

そして、明治初期の測量は、英人マクヴァインなどの指導で実施されたことからか、水準点にはイギリスでも使用されている「不」状の記号を石柱、華表（鳥居）、石垣、欄干などの構造物に刻んだ「几号水準点」が使用されている。少々発見がむずかしいが、ニコライ堂主教館の基礎にも、その几号水準点がある。



ニコライ堂の几号水準点

・神田上水（掛樋跡）（左岸）

神田上水は、井の頭・善福寺・妙正寺池を水源として小石川の大洗堰で分水、水戸藩邸内を経てこの位置で神田川を掛樋で渡り、江戸北東部の市街地に給水した。人口の密集する江戸の下町は、埋立地が多く、井戸を掘っても良質な水を得られなかった。徳川家康は、江戸入府に先立ち家臣の大久保藤五郎に命じて水道の開発にあたらせ、これが神田上水のもとになった。臼角坂（さいかちざか）の最高所からは、元和 6 年（1620）に人工的に開削

された「平川放水路」（「御茶ノ水溪谷」）が望め、当時の苦勞を偲ぶことができる。

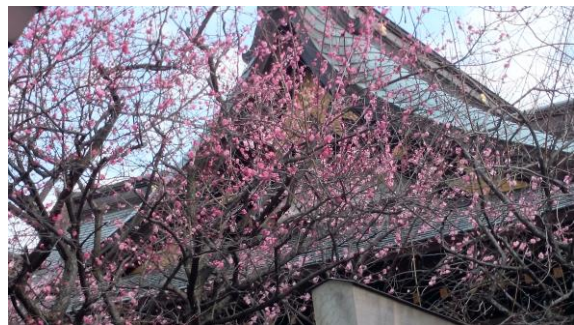
坂の途中の JR フェンスの前に神田上水が懸樋で神田川を越えた「神田上水掛樋跡」の説明が、対岸（左岸）の工芸高校前あたりには同碑と「御茶ノ水分水路碑」がある。

・ 本郷給水所公苑（（左岸）順天堂大学の北）

本郷給水所公苑には、神田上水石樋が移築復元されており、東京都水道歴史館も併設されている。外回りを歩いてみるだけでも、江戸時代の水道の様子を知ることができる。お茶の水駅、水道橋駅近くでは、興味にしたがって現在の水準点、三崎神社、神田六叉路に立ち寄るといい。

・ 小石川後樂園から北野神社（左岸）

小石川後樂園は旧水戸徳川家の上屋敷の庭園で、林泉美に富む回遊式庭園である。江戸時代初め、徳川御三家の一つであった水戸家の祖徳川頼房は、寛永 6 年（1629）三代将軍家光から与えられたこの邸地に回遊式庭園を築造した。昭和 27 年文化財保護法に基づく特別史跡及び特別名勝に指定された。その小石川後樂園東門は、普段は閉鎖されているが、こちらがもともとの正門である。



水道橋あたり / 北野神社で

・ 神田上水跡（金剛寺坂・新坂・切支丹坂・荒木坂・脇部坂・大日坂）

江戸時代の伝統的な呼び方に従えば、井の頭池を水源に、途中、善福寺池、妙正寺池からの流れを集め、関口村駒塚（駒留）橋先の大洗堰で余水を江戸川（現神田川）に落とし、以降は白堀（素堀）で水戸屋敷（後樂園）の北西から東へと追抜けて、懸樋で神田川（御茶ノ水溪谷）を越え、埋樋で神田、日本橋地域に給水された。

大洗堰から水戸屋敷を結ぶ神田上水跡が、北側にハケを連ねた曲線を描く道路となって残っている。

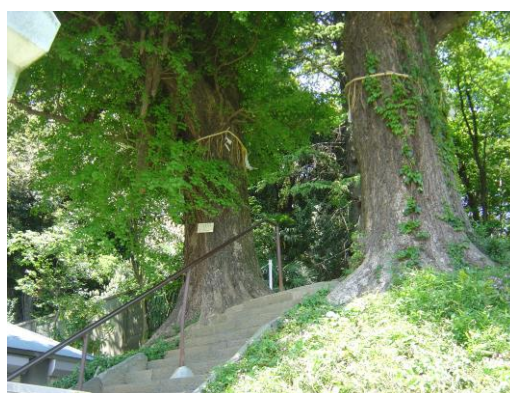
・ 関口大洗堰（左岸）

「新編武蔵風土記稿」に「堰 神田上水と江戸川の分水口にあり、大洗堰と号し、御普請所なり、石にて築畳み、長さ十間幅七間の内水口八尺余、側に水番人の住せる小屋あり」とある。この大正 8 年に水門を鉄製にするなど若干の改修を行ったようであるが、取水は昭和 8 年（1933）に廃止されて、堰自体も撤去された。

・目白坂から椿山荘（左岸）

中清戸（現清瀬市内）に、御鷹場御殿があり、将軍が鷹狩に通うこの道を清戸道（坂）と呼んだという。そして農作物を運んだという目白台地へと上る坂道の両側には寺社が並び、今でもその面影を感じる。

江戸時代は、ツバキの自生する景勝の地として知られた椿山で、広重の「江戸名所百景」にも、「関口上水芭蕉庵椿山」として描かれている。江戸末には上総久留里藩黒田家の下屋敷だったが、明治 11 年（1878）、山縣有朋の別邸「椿山荘」が設けられ、その後ホテル・結婚式場となった。園内には、「古香井（ここせい）」という湧水がある。



目白坂旧交番跡 / 水神社の銀杏

・新江戸川公園（左岸）

椿山荘の西には、かつて神田川の崖線を利用した細川家下屋敷の大名庭園があった。現在は文京区立新江戸川公園となっている。公園正門（西）奥の坂は幽霊坂で、東の坂は胸突坂でその両側に水神社と芭蕉庵がある。

神田上水の守り神である水神社は、2本の銀杏が美しい。芭蕉庵は、松尾芭蕉が日本橋から深川に移る前に、当地で神田上水にかかわったといわれる（1680）。そのころはまだ俳諧師として生活できるほどの実績が無かったので、神田上水の浚渫作業を請負、数百人の人夫を使用してこの地で工事にあたったといわれる。邸内に石鉢に落ちる湧水がある。

都電早稲田駅北の豊橋辺りには、海から 17.6km、墨田川から 7.0km を示す距離標がある。





染ものがたり博物館

- ・ 染ものがたり博物館（左岸）から面影橋（山吹の里）

桜並木の神田川を進んだ先にある面影橋は、目白台から続く鎌倉街道と推定される古い街道沿いにあり、かつて姿見の橋ともいわれていたとも。橋の手前には、「染ものがたり博物館」が、橋のたもとには太田道灌ゆかりの「山吹の里碑」が建つ。

面影橋（山吹の里）、曙橋、高田橋などを経て高田馬場駅へ向かう。

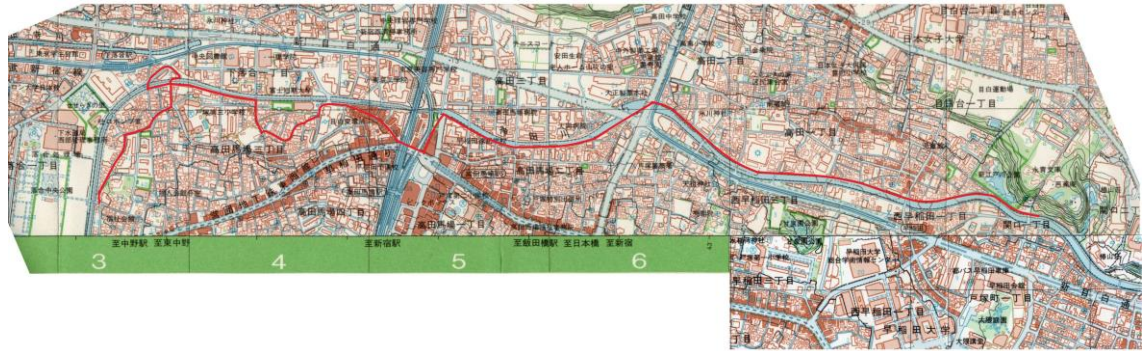
## 神田川の橋名一覧（一）

橋名	所在地名（右岸）
柳橋	台東区柳橋
浅草橋	台東区浅草橋町
左衛門橋	千代田区東神田
美倉橋	千代田区神田佐久間町
和泉橋	千代田区神田佐久間町
神田ふれあい橋	千代田区神田佐久間町
万世橋	千代田区外神田
昌平橋	千代田区外神田
聖橋	文京区湯島
お茶の水橋	文京区湯島
水道橋	文京区後楽
後樂園ブリッジ	文京区後楽
後楽橋	文京区後楽
小石川橋	文京区後楽
船河原橋	文京区後楽
隆慶橋	文京区後楽
新隆慶橋	文京区後楽
白鳥橋	文京区水道
新白鳥橋	文京区水道
中之橋	文京区水道
小桜橋	文京区水道
西江戸川橋	文京区水道
石切橋	文京区水道
古川橋	文京区水道
掃部橋	文京区水道
華水橋	文京区水道
江戸川橋	文京区関口
一休橋	文京区関口
大滝橋	文京区関口
駒塚橋	文京区関口
豊橋	新宿区西早稲田
仲之橋	豊島区高田
三島橋	新宿区西早稲田

面影橋	豊島区高田
曙橋	豊島区高田
高戸橋	豊島区高田
高田橋	豊島区高田
源水橋	豊島区高田
戸田平橋	豊島区高田
高塚橋	豊島区高田
神高橋	豊島区高田
清水川橋	新宿区下落合
田島橋	新宿区下落合

# ルートマップ





+\* \* \*+ オフィス 地図豆 yamaoka mitsuharu +\* \* \*+